

まちづくり ひろしま

第45号 (令和2年1月15日)

読者数：645名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

謹賀新年

広島市中央公園特集

□ 巻頭言

あなたに問う！プロ広島サッカー場建設



中国セントラルコンサルタント代表 前岡智之

広島市、広島県、商工会議所、サンフレッチェ広島の間で広島サッカー場が広島中央公園・芝生広場に決定した。とのことで現在、これを前提とする中央公園のこれからのあり方が検討されている。

原爆ドームだけではなく平和記念公園や中央公園の広島城を含めたこの場所全体は、美しい都市広島の再生のシンボルとして、平和大通りや河岸緑地とともに緑豊かな空間を形成している。

子供たちや世界からひろしまを訪れる人たちが平和な都市を体現できる永久の役割を担っており(ひろしまの基本コンセプト)、ここ全体を世界遺産にすべく市民全体で考えていくべきであり、50年100年位を視野に入れたプロセス・プランニングが必要である。

この点に対してプロサッカー場がどのように意味づけられて、位置づけられるのかを明確にしなければならない。サッカー場ありきから中央公園のあり方を組み立てようとしているとしか考えられない。

すなわち、世界に向けて平和な都市を表現する永久の役割(基本コンセプト)に対して、明確な答えが出てこないのなら、中央公園の利用に決定的なダメージを与えるプロサッカー場の建設は、広島市民として慎重に考える必要がある。

巻頭言としては異例かもしれないが、読者の意思表示を求めて、あえてここに白板を置く。多くの読者が忌憚のない考えを組み立てていただきたい。



ご意見は、編集者宛てメール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp まで

□ 特別寄稿

新サッカー場、次善の策はいかが

広島アイデアコンペ実行委員会 瀧口信二

現在、広島の新サッカー場計画が中央公園の自由・芝生広場を前提に進められている。

市の公園整備課によるサッカースタジアムについて有識者の意見を聴く会が開かれ、並行して市の都市機能調整部による中央公園の活用策を検討する有識者会議も開かれている。更に、市の住宅系主導による地区住民との協議会は基町地区の活性化に取り組んでいる。

地区全体の統一したビジョンなく、それぞれがバラバラに動いているように見える。

当初みなと公園と旧市民球場跡地が候補に上がり、どちらもつぶれ、どさくさに紛れて自由・芝生広場に決定された感がある。本当にあの場所に建てるのが妥当なのか否か、大前提となる基本的な検討が十分になされていない。

都市公園法によると、都市公園に建てられる建物の建蔽率（敷地面積に対する建築面積の比率）は原則2%以下で、サッカー場などができる場合は12%まで緩和できる。

城周辺などを含めた中央公園全体でクリアできると想定しているのであろうが、自由・芝生広場の南側に位置するエリアその他においても将来需要を考慮しておかなければならない。

サッカーグラウンドは南北軸に配置するのが基本なので、南北の敷地目一杯に建てざるを得ず、建物をセットバックさせて十分な緑地帯を設けることもできない。そうすると約170m×170m、高さ約30mの巨大な箱モノが基町アパートの面前に居座ることになる。

当然環境アセスメントはやっていると思うが、全く公表されていない。

敷地の南側と東側にバスの幹線道路が走っているから、サッカーやイベントなどの開催日には車のアクセスが増え、交通渋滞の影響が大である。交通が集中するところにサッカー場を作ると、車利用者を制限してもバス停を設置したり、サービス用のアクセスが増えたり、いろいろな課題が生じてくる。

敷地ギリギリに高い建物を建てる場合、建築基準法の道路斜線制限や北側斜線制限、日影規制を受ける。斜線制限がクリアできても日影規制や人・モノ・車の動線等を勘案すると、これまで示されているような計画案は建たないだろう。

アパートからの眺望も悪くなるし、日が当たらないところも増えてくる。また、巨大な壁面（スタジアムの屋根の高さは約40m）が出現することにより、周辺との景観の調和も壊される。さらに、広島城エリアと河岸緑地側エリアが完全に分断され、中央公園全体のまとまりも悪くなる。

本当に都心の貴重な都市公園にこんな巨大な箱モノを建てるのが許されるのだろうか。

都市公園は基本的にオープンスペースや緑の空間を設けて多くの市民がくつろげるためのものである。特に広島の中央公園は平和記念公園と一体となって広島のまちのコア（核）と位置付けられている。

広島市民だけでなく外から観光などで来広される人たちにとってもくつろげるスペースであることが求められている。そこにサッカー場ができるとオープンスペースが半減して、都市公園の本来の機能が果たせなくなる。

現状が都市公園の機能を発揮していないから、そのスペースをつぶしても良いという議論にはくみしない。あそこは都市公園の機能がもっと発揮できるように整備すべきであり、サッカー場を建設することは妥当ではない。

以上、自由・芝生広場への新サッカー場建設に異を唱えたが、サッカー場を希望する民意があることも理解できる。そこで、次善の策として、自由・芝生広場の北側に位置する基町中層アパート跡地（5ha以上あり）を推奨したい。

県営住宅の方はすでに解体済みであり、市営住宅の方も解体予定と聞く。現在は都市公園外にあり、用途地域を商業地域（今



市が公表するイメージパース



イメージパース私案

の第2種住居地域でも可能かもしれない)に変更すれば、サッカー場の建設も可能となる。

隣接する高層アパートも公営住宅から宿泊施設や事務所、店舗などに順次用途変更していき、寿命が来れば解体して公園に戻す。その時にサッカー場エリアも一緒に都市公園に戻せば、緑の中のスタジアムとして理想の姿に近づくであろう。

もともと基町団地は都市公園から緊急避難として住宅用地に転用したものである。

この場所の場合、メインの人のアクセスが川沿いのポップラ通りとなり、河岸緑地と一体となった魅力的なスタジアムが誕生する。また不整形な敷地を逆手にとってマツダスタジアムのようなユニークな設計も可能である。なにより高層アパートエリアと一体となった整備をすることができる。

周囲に威圧感を与えることなく、風通しの良い、オープンなスタジアムが理想である。

『基町高層住宅街は順次用途変更し、その役割が終る頃、2045年(被爆100年)には解体して都市公園に戻す』という英断をトップが下せば、多くの問題は解決するであろう。



サッカー場配置私案

ひろしまのまちづくりの動き

① 広島中央公園の活用策素案を公表!

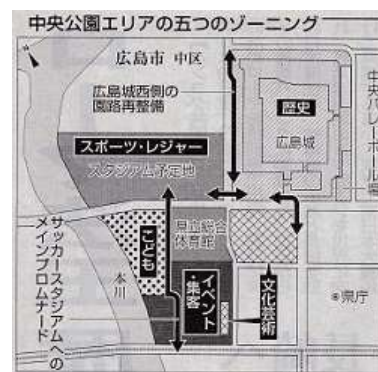
広島市は昨年11月20日に第2回目の「中央公園の今後の活用に関わる有識者会議」を開催し、旧市民球場跡地を含む中央公園全体の整備方針素案を示した。

過去に検討した内容を踏襲したもので、スポーツ・レジャーゾーンにサッカースタジアム予定地を明記した以外、目新しいものは見当たらない。

同時期に市の「サッカースタジアムについて意見を聴く会」も開かれ、スタジアムの機能や賑わいづくりのアイデアや課題を整理し、今年度中に策定する基本計画に反映するという。

本来は、「中央公園の今後の活用に関わる有識者会議」で、サッカー場が中央公園に適当か否かを審議して、適当と判断したうえで「サッカースタジアムについて意見を聴く会」に進めるのが筋であった。

有識者会議のメンバーの中にも都市計画の専門家は、サッカー場の計画に疑問を呈している人が多いのではないだろうか。未来の広島のまちに悔いを残さないためにも勇気をもって異議申し立てをしてほしいものだ。



中国新聞(2019.11.21)

② どうなる被爆建物「旧陸軍被服支廠」の行方!

広島県は昨年12月に広島市に残る最大規模の被爆建物「旧陸軍被服支廠」の1棟を保存活用し、残り2棟を解体する方針原案を提示した。

築100年を超えて老朽化し、大地震時には倒壊の危険性がある。保存のための耐震改修に多額の費用を要することがネックになったようだ。

早速、市民団体「旧被服支廠の保存を願う懇談会」を始め、一般市民からも全棟保存の声が広がっている。

広島市は全棟保存を要望し、国は県と歩調を合わせている。県の方も広く県民の意見を募るため県のホームページで公開しており、1月16日の締め切りが迫っている。

県はこれまで「瀬戸内海文化博物館構想」(1995年)や「ロシア・エルミタージュ美術館の分館誘致構想」(2000年)を練ったことがあるが、いずれも採算性が見込めないと断念している。

果たして採算性や経済性を優先すべき事案であろうか。原爆ドームと同様に、被爆建物とし



中国新聞(2019.12.3)
手前から1~3号棟

て墓標のように残っているだけでも価値があると評価すべきではないか。

今のように門扉を閉ざして立ち入れないようにするのではなく、土日・祝日だけでも市民に開放して建物に親しめるような環境を整えるべきである。そのための仕組みやアイデアを広く世界に問えば、多額の投資をしなくても活用の道が開けるだろう。

○ 広島市中央公園を考える⑫ 建築家藤本昌也氏の提案

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、基町高層団地（以下、〈M 団地〉と略称）の設計に携わった建築家藤本昌也氏の提案をメルマガ 31 号巻頭言を中心に「建築を語る会」などの講演会での発言を含めて整理し紹介する。

広島市〈中央公園〉及び周辺地域の今後のあるべき姿

— 建築家の立場からの提案 —

もともと復興に向けて 1946 年に制定された都市計画では、〈M 団地〉を含む周辺地域一帯は全て、南の原爆ドームや広島平和記念公園につながる大パブリックオープンスペース（中央公園）に指定されていた。市の中心部を南北に流れる太田川と一体となって計画されたこのシンボリックな空間演出こそ、復興平和都市建設を目指す広島市都市計画の要の役割を果たすはずだった。その復興都市計画の原点に戻り、当時の発想を基本に、今後の中央公園地域一帯の〈あるべき姿〉を提案する。

1 基本理念

わが国の 20 世紀後半は、高度経済成長を背景に、〈建築〉づくりを謳歌した時代だった。それは一方で、〈建築〉をつくり過ぎ、貴重な建築遺産や豊かなくオープンスペース、緑を失った、ゆとりの無い建築過剰時代でもあった。

21 世紀に入り、超人口縮小化時代を迎えている今だからこそ、巷間言われている〈空地〉〈空家〉の問題を否定的に捉えるのではなく、“〈空地〉こそ最大の価値”との思いを共有し、〈空地〉を主役に、まちのリフォーム（まちの空間再編）に取り組むべきである。

この中央公園は、歴史的・文化的な意味で、人類にとって唯一の特別な〈場所性〉を有している。原爆で命を奪われた多くの方々への慰霊の場、平和への祈りの場、そして、反戦の意志を示す場でもある。この広島市民の変わることのない精神のあり様を表現することこそが、この“場”の空間整備手法に求められる最優先課題である。

2 提案

*** 大空地空間** 現在の中央公園用地を、地域関係者との合意を図りながら、時間をかけて、南北へ可能な限り拡張、最大化を図ること。市民は再び、太田川沿いに平和公園、原爆ドームと一体となって広がる最大の価値〈大空地空間〉を取り戻すことになる。

*** 大緑地空間** この取り戻した〈空地〉を芝生と樹木とわずかな装備（ベンチ、外灯等）で構成された〈大緑地空間〉として整備すること。市民の誰もが〈自然〉そのもの、緑と太陽と空気を素直に精一杯楽しめればよい。市民の日常生活上の多様なニーズには、その時々で仮設的簡易木造建築で対応すればよい。何よりも、つくり過ぎないこと。殊に、大規模建築施設は論外。

*** 開放的な空間** 城跡公園が〈M 団地〉を介して、中央公園とオープンスペースとしてつながり一体化するために、団地中央の大規模中庭空間をより開放的な空間にリフォームすること。

住宅団地が市民の大事な公園の一部を占拠し、周辺を閉鎖的な〈まち〉にしてしまうことを解消しようと採用されたのが全棟総〈ピロティ方式〉であった。しかし、中庭全面に都市施設導入のための 5m の高さの人工地盤が、結果として〈ピロティ方式〉の効果を半減させているので、店舗施設の再編と人工地盤の減築を



大空地空間計画案



イメージ写真

合わせて進める〈まち〉のリフォームが必要。

*** 基町高層アパートの今後の展望** 時代の変化に耐えうる構造となっているので、管理運営面のソフト開発に期待。第3の公共が建物を所有し、空間の利用権を民間に賃貸するシステムができないか。例えば、広島城側は高級マンションにしたり、店舗フロアを入れたり、いろいろな可能性が秘められている。

(以上は**建築家藤本昌也氏の提案**の概要)

<コメント>

・メルマガ31号(2017年9月15日)の巻頭言は広島市長の胸に届けたいとの藤本氏の強い意向があった。しかし、平和記念公園と中央公園の緑が一体となって原爆ドームの世界遺産のゾーンを広げ、平和の象徴的な空間であって欲しいという願いは市長に伝わらなかった。

・中央公園の自由・芝生広場にサッカー場建設を決定したことは、藤本氏にとって論外であり、戦後広島のまちづくりの歩みを知る多くの人にとっても同じであろう。

・今の空き地状態よりサッカー場でも建設した方が有効利用であり、特別な感慨は湧かないというのが、一般市民の意識ではないだろうか。都市公園の本来の意義や都市計画決定の経緯についてほとんど認識がないからである。その認識を正すのが、行政やまちづくりの専門家や有識者の務めであり、決断を下すのが政治家の役割である。

・藤本氏たちが設計した基町高層アパートに対する藤本氏の提案は大胆である。公共住宅から民間に賃貸できるシステムや中央に位置するショッピングセンターの人工地盤を減築して地上面の開放性を広げるリフォームはすぐにでも実現してほしい。

(編集委員 瀧口信二)

○ 新サッカー場計画に対する読者からの投稿

広島市中央公園について

自営業 浅野政則

人は何故争うのか？人は何故人を傷つけ、人を殺してしまうのか。

人間性回帰、人が人として本来の心を持てる空間(精神的にみても物質的にみても)を構成するべきである。

原始の時代から人は命を守るため野獣と戦い、また生きる(食べる)ために動物を殺し、その命をつないで来た。人間が争うのは動物と同じように生きる(食べる)ため、また種族を後世に残すことが目的であった筈であった。しかし、この本来の目的がいつのまにか物欲に代わり、効率の良い武器を使って大量の人を殺傷する事になってしまった。

非常に残念な事であるが、地球上では今でもこのような事が起きている。文明の利器は上手に利用すれば、その価値は人類にとって非常に役に立つものであるが、利器であるだけに使い方方を誤ると大きな間違いを犯してしまう。2011年3月に発生した東日本大震災でも原子力発電という人類にとって利器であったはずのものが、人類に脅威をもたらす最も恐ろしいものになってしまった。

人類は極論すればこの100年足らずの急速な技術の進歩によって、様々な利便を得て来た。航空機、自動車、家電製品、IT技術など、100年前には考えも付かなかった技術が生み出され、快適な生活を送れるようになってきた。しかし、この結果が様々な競争社会を生み出し、ひいては大量破壊兵器を使った戦争という悲惨な世界をも生み出してしまったと言える。

人類が地球上に出現したのが約600~700万年前の人類の歴史からすると、あまりにも急激な生活様式の変化、生活のスピードが急激であったことが人々の心まで性急にしてしまったのではないのでしょうか。本当はもっとゆったりとした生活があっても良いのではないかと考えさせられる。なぜこんなに急ぐ必要があるのか？

しかし、今、100年前の生活に戻れと言われても、それはあまりにも難しい要求であると誰しもが思うことと思います。ただ精神は100年前に戻る事は不可能ではないと考えます。100年前の精神で現在の生活をすれば、有難さも感じられるし、エコな生活も送れると思います。

こんな精神を生み出す空間。人が人として最も安らぎを感じられ、癒される空間をつくり、

人の心が癒され穏やかな精神状態を作り出す空間作りが、平和都市広島にふさわしい街創りと考えます。日本中、世界中の人が訪れ、本来人間の生活空間はこうであるべきと共感を覚える街にすることが・・・平和都市広島の果たす役割と考えます。

広島は幸いにも文化施設が集約されて建設されており、19世紀の遺産、広島城、20世紀の遺産、平和公園、そしてこの中間を結ぶ位置に広島中央公園が存在します。この立地条件に二つの遺産を展望できる平和の丘（Peace Hills）を創ることを提案します。

現在の中央公園近辺の道路の上に橋上化した高台を作り、広島の文化遺産を文明の利器が目に入らない環境で3つの施設を見学、また散策できる安らぎの空間を創る。

橋の下は文化施設（美術館、図書館、科学館など）、スポーツ施設（屋内競技場、プール、武道場）、遊びの施設（自然を取り入れた川、アスレチックなど）を作り、子供達が安心して学び、遊べる総合文化施設を作る。

（補足）

メルマガ「まちづくりひろしま」は世界に誇れる広島のイメージを創る上で大変重要な取り組みと感じています。

世界の大都市には必ずといって良いほど都心に自然を満喫できる公園が存在します。人は自然に癒されてリフレッシュし、さまざまな創造力が生まれてくるものと考えています。経済の大都市でもある『ニューヨークのセントラルパーク』、『イギリス ロンドン ハイパーク』、『フランス パリ コンコルド広場』など、また日本にも『東京の皇居外苑』などがあります。

商業的な施設も人々が集える空間ではありますが、世代を問わず永い年月を考えると都心の自然空間は人々にとって心を癒し、平和を感じる癒される空間になると信じています。

○ 新サッカー場計画に対する読者のアンケート結果

前号配信時に新サッカー場の建設に対するアンケートを実施し、7名から回答を得た。数が少ないので統計分析はなじまないが、読者全体の傾向は示していると思う。

- ・中央公園芝生・自由広場での建設に対して、賛成が2名、反対が4名、その他が1名
- ・賛成の理由としては、①観客の増加、②サッカー熱の上昇、③まちの活性化、の3項目には該当者が多いが、④都心に都市公園は不要、の項目には該当者なし
- ・反対の理由としては、①公園を侵食、②周囲への悪影響、③都心のサッカー場は不適、④公園本来の使い道がある、の4項目とも均等に該当者あり
- ・その他、コメントを列記する。

○条件付き賛成。建物を建てず緑地で残してはいかがでしょうか。イベント会場兼用として。60年前に、ここには児童公園があり私もよく遊んだもので、市内に舗装のない緑地帯があってもいいと考えます。

パリにもあり、北京にもあり、またニューヨークでいえば セントラルパークですね。狭い日本に土地がもったいないとも言われますが、平和公園は市民のものにあらず、国家の象徴です。

せめて、市内のど真ん中に年中使えるイベント公園（防災地兼用。地震で橋が壊れても、遺産航路から他地域へアクセス可能）があってもいいのではないのでしょうか？

もしサッカー場を作るならば、アストラムを延伸し、宇品あたりでもいいかと存じます。福岡にせよ広島にせよ、100年の都市計画を考えず、その場しのぎの対策に見えます。

（男性、70歳代、廿日市市在住）

- 市民参加の意見が見えない。（男性、70歳代、広島市内在住）
- 市営住宅の見直しも必要。立地条件のよい場所であり、そこに公営のアパートが必要であるのかの検討も必要。（男性、60歳代、広島市内在住）
- 現在のエディオンスタジアム（西風新都）の維持と整備にも多額の市税を投入していると聞いています。試合回数の少ないサッカー場を維持するために、さらに、多額の税金を投入することに反対です。これから少子化の時代、税金の無駄遣いは止めてほしいと思います。（男性、80歳代、広島市内在住）
- 広島市の中心地として平和遺産（平和公園）、歴史遺産（広島城）等との一体感を考えたときに違和感があり、相応しくない施設だと思います。平和公園、広島城等との一体感のある自然公園がふさわしいと考えます。（男性、60歳代、広島市外在住）

○ 広島復興の軌跡・人物編（第20回）～長岡省吾初代原爆資料館館長（後編）

～原爆資料館の基礎を築いた不遇の偉人～

長岡省吾氏について前号で書き切れなかったので、続報とする（本文は敬称略）。

4. 原爆資料館の開館への道程と苦難

長岡の被爆資料の収集については前号で触れた通りであるが、最終的にその資料を生かす道が開かれたことは、長岡にとっても、その後の広島市にとっても、今日の平和資料館の存在につながったということで、画期的な出来事であったのかもしれない。しかしその道のりは平坦ではなく、長岡にとっては苦難の過程であったろう。

1949年9月に基町に建設された広島中央公民館内に原爆参考資料陳列室が開設されたことは既にふれたが、この時被爆瓦や岩石、ガラス、植物等数千点が展示された。その数は一説には6700点といわれるが、それだけの資料を展示したとすれば、恐らく、雑然と積み上げたような展示であったろうが、少なくともこの時被爆資料の公開、展示へ踏み出していったことではまさに画期的なことであった。この時の様子を伝える『ヒロシマの記録／被爆35周年写真集』（中国新聞社、昭和55年）によれば「初めて被爆陳列室／広島市基町の中央公民館に原爆参考陳列室が開設されたのは九月二十五日。（中略）公民館の一室に机やイスを並べ紙を敷いた上に石、かわら、コンクリートの破片、植物類などを陳列しただけの貧弱なものだったが、これがのちに広島平和記念資料館に成長する」と記述された。

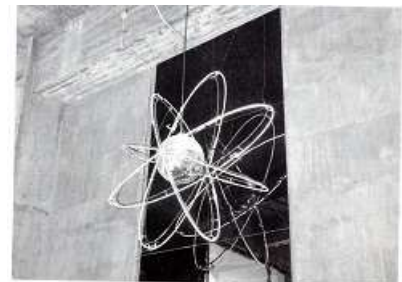
これより先1949年5月、平和記念公園及び平和記念館設計コンペの募集要項において、記念公園の造園計画とともに、その基本的な設計対象施設・建物として、平和記念館、国際会議等の集会室、原子爆弾災害資料の陳列室、収容人員2000名の集会場、その他が明示された。すなわちコンペ段階においてすでに原爆災害資料陳列という要件が設定されていたのである。この重大なキーワードをコンペ要項に挿入したのはだれか、当時の浜井市長、土木課の基本方針であったことは間違いないが、長岡の強い意思の反映、さらには戦災復興院囑託として派遣され広島市復興審議会にも関わり続けていた丹下の意向も反映されたのかもしれないが*1詳細は不明である。

そしてコンペの結果、丹下グループ案が1等当選し、その案を基に最終的に実施設計がなされて、丹下が記念陳列館と呼んだ中央の建物の起工は1952年2月であった。資料館実現への幸先良い出発と思えたのであるが、現実はそのほど甘くはなく、なかなか竣工に至らず、未完成のまま長期的に放置された。広島平和記念都市建設法に基づく記念施設に該当する建設費は国からの補助は3分の2で、広島市にとっては恵まれた事業といえたが、逼迫する国家予算は広島向けに十分な予算を充てることができず、未完成のまま放置され鳥かごと呼ばれるような長期にわたる事業となってしまったのである。コンペ結果の発表以来6年以上、起工以来3年以上を経て、1955年8月ようやく竣工したのであった（平和記念館は1952年3月起工、1955年5月竣工）。この間、陳列館の完成を待ちわびていた長岡の気持ちはどのようなものであったろうか。遅くなったとはいえ、平和記念公園において同年8月24日原爆資料館として開館したことは、その初代館長となった長岡にとってある種の達成といえようが、苦渋を味わいつつの到達であったことだろう。

5. 歴史的に問われる際どい問題に遭遇

被爆後10年を経て原爆資料館が完成し、資料100点が展示され、初日も600人で賑わったとされる*2。このまま資料館の展示が整備され、内容が充実していくはずであった。ところが歴史の歯車は予想外の方向へ回り始めるのであった。それが「原子力の平和利用」という強力なキーワードであった。

そもそも原子力の平和利用ということではアメリカのトルーマン大統領の発意もあり、アメリカは1951年世界初の原子力による発電を成功させ、1953年12月にはアイゼンハワー大統領の国連総会での平和利用提唱の挨拶があり、そのリーダーシップのもとに、強力に日本を巻き込み、政策転換を迫るものであったといえよう。原子力も平和利用すれば人類のためなるという発想であるが、勘ぐれば被爆という原子力の負の効果を和らげようとする意図も交じっているかもしれないのであり、ある意味で広島をターゲットとして反核・非核の考え方の変更を狙っていたのであろう。広島に平和利用関係の資料を押し付け、展示を迫ってきたのではないか。この時長岡館長は「これまでは惨禍の跡をとどめる資料にとどまっていたが、各界の協力で世界的な原子力博物館に発展していく機運にあるのはうれしい」と発言したとされる。1958年に開催された復興大博覧会で、被爆資料を押しつけるようにして、原子力平和利用関係の展示となった。



原子力平和利用としての展示

占領下であって、GHQへの畏怖、無抵抗といった風潮が支配的時代

であった時、異を唱えることができたであろうか。日本政府も正力松太郎原子力問題担当相も連携して、アメリカからの勧誘・圧力・強制を受け止めていたし、恐らく様々な力が働いて、原爆資料館の対応となったのではないか。この時の長岡の真意を確かめるべくもないが、資料館が原子力の平和利用という笛の音で踊ったことが、歴史の1頁に刻まれることとなったし、資料館の今後の在り方の中で常に振り返るべき重い過去となったのである。

長岡が館長を辞任した後のことであるが、1997年の資料館リニューアルに際して入口付近に被爆人形を置くことが問題となり、長岡は疑問を提示していたという。2019年4月再オープン時の展示替え計画では取り除くことが問題となった。すなわち、1次リニューアル計画では、そのような被爆人形を置くことがよいのかという問題提起であり、2次リニューアル計画で取り除くことが被爆の実相を伝えなくなるのではないかという、裏表の関係であった。展示問題の基本的な考え方が問われている。長岡の正確な意向は伝えられていないが、ジオラマ展示は必ずしも被爆の実相を伝えるものではなく、問題があるという立場であったのであろう。

6. 長岡が託した長岡資料の今後の課題

長岡への評価は様々あろうが、さらに重大なことは長岡家に残されていた膨大な長岡資料の扱いである。その資料は現在、原爆資料館に寄託されており、一定の条件のもとに利用が可能である。資料全体の分類や内容把握等が容易ではないが、少なくとも利用の方向をいくつか定めて実践していくところが考えられるであろう。一つは、今まで展示されてきた資料の関連情報の項目寄せ、可能であれば資料のファクトチェックといわれる作業である。あまり利用価値がなければ、それまでということになるが、長岡資料のもう一つの大きな調査資料遺産として、被爆後の建物調査がある。今まで被爆資料として利用されてこなかったのであるが、改めて見直しその価値を探るべきであろう。いずれにして資料の有効な公開と利用手段の明確化が進められるべきであろう。そのことによって長岡が広島に託した大きな貢献に報いるものとすべきであろう。

(編集委員 石丸紀興)

注：長岡省吾の略歴：前号記載のため省略

*1 この件に関しては別途考察する予定である。

*2 1955年8月24日付中国新聞

〇 “ひろしままちづくりHACK” 発足！

HACK 桧山 渉

昨年7月に実施されたWorld Cafe 風グループ討議の主力メンバー6人が集まって“ひろしままちづくりHACK”を結成。(参照：facebook.com/ひろしままちづくりHACK)

2019年11月29日、イノベーション・ハブ・ひろしまCamps(以下、Camps)で毎月行われるイベント、Meet Upの一貫として、『Meet Up Camps【つまみは広島！国境を超えるアイデアソン・バー/Hiroshima Improvement Forum WITH BEER】』(主催：広島県イノベーション・ハブひろしまCamps、後援・協賛：サントリー株式会社)が開催され、HACKは、主催者側として関わることとなった。今回のイベントの全体統括者である桧山渉、及び各HACKメンバーの人脈やCamps等の協力もあり、参加人数はCampsのイベントで最大の参加人数(イベント開始時点で50名以上)になった。

内容は、以前行ったWorld Cafe 風グループ討議のコーヒーを、ビールに持ちかえたようなものである。ただし、参加者には広島在住の外国人やイベント開催直前に、周辺でチラシを配布し興味を持ってくれた人(外国人も含む)もいて、いい意味で多様な人が集まったといえるだろう。

今回はひろしまについて「平和都市」「ワークライフバランス」「旅行」「交通」「パブリックスペース」の5つのテーマで話し合い、テーマごとにテーブルを分け、参加者自らが興味あるところに参加してもらった。

以下、各テーブルホストが気になった点について、その概要(ワンポイント)を整理する。

・平和都市について(テーブルホスト：片島蘭)

平和という言葉は、教育・経済・環境・防災など1人1人イメージが異なっており、まずは自分の身近な幸せから考え、他者の幸せと繋がるのが大事だと共有した。

・ワークライフバランスについて(テーブルホスト：石原悠一)

ワークライフバランス、人生の楽しみ方は、その土地の自然環境や文化で違う。欧米の真似をするのではなく、海外のいろいろな取り組みを取り入れながら、日本に合ったものにしていきたい。



・旅行について（テーブルホスト：高橋幸子）

旅と食についての話題が中心となった。旅の目的として広島にあるべきものは、この「イベントのような交流」という意見が出された。平和都市として目標としたい在り方の一つだ。

・交通について（テーブルホスト：桧山渉）

住民をつなげる道路は、実質的な都市の最小単位でもある。身近な名前のない道路に「自分たちで名前を付けたい」という声が出れば、それも立派なまちづくりのスタートなのかもしれない。

・パブリックスペースについて（テーブルホスト：松波静香）

ひろしまのパブリックスペースの事例を紹介したが、思いのほか知っている人が少なかったのが驚きであった。

今回は参加人数も多く、言葉の問題もあり、時間的に意見をまとめて、それに対してアイデアを考えて話す、というような流れではなく、ひたすら話し続ける内容であったが、参加者の方は、気持ちよく話していただけたような印象を受けた。

HACK のキックオフイベントとしては、まずまずの成功といえるだろう。しかし、課題もある。特に、活動をどうマネジメントしていくかは大きな課題である。今回は Camps 等の協力でイベントを行うことができたが、HACK 単体で実施するときはどうするか。そして、何よりもまずまちを知り、想いや智を分かち合うことができる、“おもしろい” 内容をどう提供できるか。今回も、おもしろそうなイベントだったから参加してみようと思った、という方が多くいた。やはり、“おもしろさ” は重要なキーワードである。

いろいろと課題はあるが、HACK の方針にあるように、めげない、しなやかな心をもって、次の活動に向けて考えていきたいと思う。

□ 編集後記

2019 年は新しい元号になった年であった。また、1919 年に「都市計画法」や「市街地建築物法」が制定されて 100 周年を迎えた年でもあった。その意味で 2020 年は、まちづくりの新たな展開が期待される時代とも言える。

我が国の人口は、幕末には 3000 万人、1925 年には 6000 万人、1955 年には 9000 万人、1985 年には 1 億 2000 万人、ピークは 2005 年の 1 億 2800 万人であったが、今後急激に減少傾向に向かうと予想されている。

しかしながら現状は、これまでの経済効果至上主義に立ったプロジェクト群を依然と継続しており、限られた自然環境の中で持続可能な社会を実現し、暮らしやすさを確立することが後回しにされている。ここでもう一度踊り場に踏みとどまって、ここまでを振り返り、冷静にこれからを考える時期ではないのか。

これからのまちづくりのキーワードの一つに、持続可能な社会を実現するために国連が策定した 17 の目標 (SDGs) を広島市は総合計画の改定の骨組みに採用する。ならば来たる人口減少時代では、必要なものと不要なものを仕分けして再度組み立て直す落ち着いたまちづくりができる時代でもある。

参加型のまちづくりは、おもしろいよ。行政に任せてはつまらんでしょ。ひろしまのまちに幾つかの明日に向かう動きが出てくることに多いに期待したい。

(編集委員 前岡智之)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島 21 理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表